

# 対話してつながる力を育てるワークショップ

—大学生から社会人へのスキヤフォールディング—

## Workshops to Develop Dialoguing Skills, the Skills Required to Connect with Each Other

Scaffolding for the Transition of University Students to Members of Society

舟橋 宏代\*

Hiroyo FUNAHASHI\*

### 要 旨

大学の課外活動イベントとして実施された「コトバ・わたし・未来」ワークショップについて報告する。外国人学生の支援として始まったこのワークショップは、日本人学生にとっても、日常生活では得難い対話の場として設定された。国籍、民族、立場の違いを超えた対話を体験する場、地域において多文化共生及び外国人支援に携わる人との双方向の交流の場、学びあう場としてのワークショップを大学が開催することにより、大学生から社会人へ移行するためのスキヤフォールディングを目指している。

キーワード：ワークショップ、対話、双方向の交流、移行、スキヤフォールディング

### 1. はじめに

現在、鈴鹿大学に在籍する外国人学生には、外国の教育課程 12 年以上を修了し、「留学生」の在留資格を持つ「留学生」と、日本の高校を卒業し、「定住者」もしくは「永住者」の在留資格を持つ「外国につながる学生」<sup>(1)</sup>がいる。両者とも、母語が日本語ではない場合、留学生対象の日本語科目を履修することができる。

外国につながる学生の大学卒業後の進路は、母国あるいは母国以外の外国における就職も視野に入っているものの、日本国内に定住する道を選ぶ傾向にある。また、留学生にしても、帰国の道を選ぶ者もいるが、日本で就職し、永住者の在留資格を得て定住する者も少なくない。當作(2013)は、外国語教育の目指すところとして、「自己の発見」「他者の発見」「つながりの実現」を目指すソーシャルネットワークワーキングアプローチ(SNA)を提唱している。これは、語学教育の理念として重要なことであるが、それにも増して、大学は現実存在するニーズに応えるために、外国人学生が日本人、日本社会を理解し、つながっていくための支援を行うべきである。

現在、留学生対象の日本語科目では、学習者が日常生活や大学における授業において、

---

\* 本学教授、日本語教育 ( Japanese Language Teaching )

大学生として十分な自己表現を行うことができるよう、改善を重ねながら授業実践を行っている(舟橋・大本 2011、舟橋 2015)。しかし、これらの日本語科目はカリキュラム上、1・2年次にしか配当されておらず、十分な自己表現を安定的に行うことができるための支援とは言い難い。

外国人学生の多くは、「話すこと」に対する不安を抱えている(舟橋 2016)。留学生の場合、それは自身の発話の正確さに対する不安であることが多いのに対し、外国につながる学生は、相手の反応に対する不安であり、それは、幼少期に受けた心の傷に深く根ざしているものと考えられる。不安を払拭し、落ち着いてコミュニケーションがとれるようにするために、課外においても支援できるしくみがほしい。特に外国につながる学生は、家庭内言語が日本語ではないことが多い。学年が上がり、出校日数が減ると、同級生と日本語で話し合う機会が持ちにくくなるという声も聞こえる。また、「話すこと」に不安を抱えているのは、外国人学生だけではない。人前で話すことが苦手であると感じ、そのような機会を避けようとする日本人学生は少なくない。

平田(2001)は、「話しことば」のうち、日常生活で交わされるやりとりを「対話」と「会話」に分けている。平田によると、「会話」(Conversation)は家族など、すでによく知っている者同士の親しい関係を確認することを目的とした楽しいおしゃべりであるのに対し、「対話」(Dialogue)とは、共感を得ることを志向して他人と交わす、新たな情報交換や交流のことである。日本人であっても、日常の話しことばは限定された親しい人との会話で中心で、他者との出会いがなければ、対話の能力を身につける機会を得ることも難しいだろう。日本人学生にとって「話すこと」への不安は、対話の経験不足に起因するのではないだろうか。一方、外国につながる学生の持つ「話すこと」への強い不安は、過去における対話能力欠如か、対話の失敗、もしくはその両方に原因があると考えられる。自身の発話の正確さに不安を持つ留学生も、対話の経験は十分とは言えないだろう。

本稿は、未知の人、立場の違う他者を理解し対話し、共感してつながる力を養うためのワークショップに出会い、それを引き継いで、大学による課外の学生支援、地域で各種の支援を行う人と若者との交流の場として企画し、実施した記録である。

## 2. 愛伝舎 Draw My Life ワークショップとの出会い

ここでは、課外における外国人学生に対する学習支援の取り組みとその問題点、および解決の方策としてのワークショップに出会った道筋を振り返る。

### (1) 課外における学習支援としての日本語スピーチコンテスト

外国人学生が日本語科目で学んだ成果を学内外に向けて発表する、課外における学習支援の場として、大学祭期間に毎年日本語スピーチコンテストが開催されている。コンテスト初回は、鈴鹿国際大学第1回留学生日本語スピーチコンテストとして、1997年に実施された。2004年第7回より、それまで留学生だけであったコンテスト出場資格を、三重県下

に居住、または勤務している 15 歳以上の外国人とした。2010 年第 13 回からは、学部 1 年生対象の初年次教育の時間に学内予選を実施している。

スピーチコンテストは、外国人学生の学習成果発表という以外にも、地域に住む外国人と日本人、時には外国人同士がお互いの理解を深め、交流する場を提供する目的で開催されており、一定の評価を得て存続している。

しかし、外国人学生に対する課外の学習支援としてスピーチコンテストを見ると、以下のような課題がある。

①発表者の数が限られている。

日本語スピーチコンテストは発足時より学外からも発表者を募集しており、発表者は概ね学内から 4 名、学外から 4 名選抜される。スピーチスキルのブラッシュアップができる発表者はごく少数である。

②一方通行のコミュニケーションであること

外国人が「話す人」、日本人が「聞く人」という役割が固定されている。

③評価されるのは「日本人が聞きたい話」

「日本人が聞きたい話」すなわち、日本人や日本文化を礼賛するものや、ふるさとや母国文化の紹介など、聞いて心地いいもの、好奇心を満足させるものが評価されやすく、その枠に入らない場合、外国人学生が身をもって感じ、考え、まとめあげたものや、切実に伝えたいことであっても、高い評価を得られないこともある。

④発表者の心理的負担が大きい

発表者は、一对多のコミュニケーションを行うことになり、その心理的負担は大きい。

「話すこと」への不安を勇気を出して乗り越えても、そこには「評価者本位」「日本人本位」の評価が待っている。出場自体が難関であり、栄えあることであると言われても、第一番目の表彰者となる「学長賞」を獲得できなければ、「評価されなかった」という挫折感につながる恐れもある。

これらの課題を解決する方策について試行錯誤していたところに、愛伝舎の Draw My Life ワークショップと出会った。

## (2) 愛伝舎 Draw My Life ワークショップ

NPO 法人愛伝舎は、2013 年 8 月から 2014 年 2 月にかけて、4 回の「Draw My Life ワークショップ」を開催している (伊藤 2014)。

ワークショップとは、中野(2001)によると、「参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり創り出したりする学びと創造のスタイル」である。講師から参加者に一方的に行われる講義を受動的に聞くのではなく、進行役である「ファシリテーター」に導かれながら参加者が対話して学び合い、新しい意見を生み出して問題を解決していくのがワー

クショップである(中野 2001)。大学におけるアクティブラーニングの実現には、こうした場を生み出すためにファシリテーターが用いる「ファシリテーション」の技術が有用であるとされ、ワークショップ型の授業実践を大学において行った報告もなされている(中野・三田地 2016)。

Draw My Life<sup>(2)</sup>とは、発表者が自身の生い立ちを紹介するライフヒストリー動画である。発表者は、スピーチをする代わりに、自分自身の Draw My Life 動画を参加者の前で上映し、参加者の質問に答える。愛伝舎の Draw My Life ワークショップでは、動画視聴とその後のやりとりをメインの活動としていた。発表者は動画を作成することにより自身の経験を客観的に捉え、考えを表明して、伝える経験をする<sup>(3)</sup>。一方、参加者は動画を視聴して、発表者の気持ちに配慮しながら感想を述べ、質問をする練習を行うのである。

愛伝舎は当時、外国につながる小中学生に対する学習支援教室を運営しており、教室に通う児童生徒の自己表現能力をさらに向上させるための取り組みとして、このワークショップを企画したのだが、回を重ね、参加者の希望を取り入れて改善するうちに、最終的には、外国につながる児童生徒だけではなく、日本人の小学生から大学生、留学生、社会人までが参加するワークショップとなった(伊藤 2014)。

筆者は、2013年12月と2014年2月の愛伝舎 Draw My Life ワークショップに参加した。かつて「外国につながる子供」であり、今は「外国につながる社会人」となった、いわば当事者がファシリテーターをつとめていた。導入部分で体の緊張をほぐす運動をし、自己紹介をして参加者同士名前を覚えあい、受け入れあっていることを確認した。その後、動画を視聴する前にブレインストーミングを2回行った。この2回のブレインストーミングがリハーサルとなり、書くことを苦手とする参加者も、動画視聴後には感想や質問を書き出すことができるように構成されていた。

このワークショップがすばらしいと思ったのは、発表者は一人なのだが、参加者すべてに発話の機会があり、自分自身を表現して対話することができる、双方向の交流になっていることである。一人一人が疎外感を持たずに参加できるよう、コミュニケーションが上手でなくても挫折しないよう、複数のブレインストーミングが設定されている。ブレインストーミングでの発話は、質より量が重んじられ、批判は禁止であることが前もって伝えられている。数回のブレインストーミングを経て、参加者はグループ内での発話に慣れ、全体に対する発話に対する負担感が減少していくように見えた。ブレインストーミング後に Draw My Life 動画を視聴し、発表者に参加者が質問するときには、発表者、質問する参加者ともに、批判されないことが既に保証されているという条件下で、一対多のコミュニケーションとしては高くない緊張度でやりとりをすることができていた。

このようなワークショップを、スピーチコンテストでは得られない、双方向の交流の場を提供するものとして、ぜひ本学において実施したいと考えた。折しも、NPO 法人愛伝舎では2014年度以降、ワークショップの開催予定がないということだったので、お願いして、

本学において同形式のワークショップを引き継がせていただくことになった。

### 3. 「コトバ・わたし・未来」ワークショップ

2015年度より、鈴鹿国際交流協会の事業支援を受け、日本人、留学生、外国につながる人が、自分の「これまで」と「これから」を話し合う機会を提供する「コトバ・わたし・未来」の取り組みを開始した。「コトバ・わたし・未来」は、「外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会」と「ワークショップ」という2種類のイベントを柱とする。

このうち、外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会は、外国につながる学生がグローバル人材として活躍するために必要な母語・継承語の運用能力向上のための間接的支援として企画された。コンテストとして競い合うのではなく、母語・継承語での発表を讃え、見守る場として実施されている。

そして、ワークショップは、Draw My Life 動画を用い、外国につながる学生、留学生、日本人学生、中・高校生、外国人支援に携わる人たちがコミュニケーション活動を行うことにより、立場の違う人の話を聞き、自分自身を発信する経験を積むことを目指すものである。

#### (1) 2015年度のワークショップ

2015～2016年現時点までに開催されたワークショップの活動概要は、表1の通りである。

ワークショップは、参加者を中・高校生、大学生、20代の社会人など若者に絞って開催する予定であった。しかし、2015年5月、第1回のワークショップでは、鈴鹿大学に在学している日本人、留学生、外国につながる学生数名しか参加表明者がいなかった。そのため、今後の広報効果も狙って、外国人支援に何らかの形で携わる支援者にも声をかけ、参加を募った。

初回のワークショップを終わってみると、若者だけが参加するのではなく、支援者である様々な立場の社会人もその場を共にする方が、国籍、年齢、立場を越えた対話をする場をつくるという、ワークショップ本来の目的にかなうのではないかと実感されたため、第2回目以降は、特に年齢などに言及することなく参加者を募っている。

このワークショップは、主催者である鈴鹿大学の教職員<sup>(4)</sup>が企画しているが、当日の受付、司会、ファシリテーターなど、ワークショップのスタッフは、初回から本学学生が務めている。支援される側にいる学生がスタッフとして運営に携わることで、ワークショップを通して、対話する場をどのように作るのか、そしてそこでどのようなことが起こるのか体感し、今後どのように進めていくべきか主催教職員と共に考え、実行していくことで、支援する側に移行していくことを狙っている。

表1 「コトバ・わたし・未来」ワークショップ 2015～2016年の活動概要

	実施時期	参加者			参加者の国籍	参加者(属性)	発表者(国籍)
		生徒学生	支援者	合計			
1	2015年5月	6名	5名	11名	日本・ブラジル・ペルー	本学学生／社会人	外国につながる学生(ペルー)
2	2015年8月	12名	7名	19名	日本・ブラジル・ペルー・ネパール・フィリピン	本学学生／中学生／社会人	留学生(ネパール)
3	2015年12月	8名	10名	18名	日本・ブラジル・ネパール・フィリピン	本学学生／高校生／社会人	外国につながる学生(ブラジル)
4	2016年5月	9名	9名	18名	日本・韓国・ブラジル・中国・フィリピン	本学学生／高校生／社会人	留学生(韓国)
5	2016年7月	18名	15名	33名	日本・韓国・ブラジル・ペルー・中国・台湾	本学学生、専門学校生、高校生、社会人	日本人学生

このワークショップを開催することで、外国人に話させて、日本人は聞くだけの一方的なイベントしかない状態から、参加者一人一人が自己開示し対話する、双方向の交流の場を作ることができた。

しかし、2015年の開催においては、各回の参加者が定員20名近く集まったとはいえ、生徒・学生の参加者数は伸びなかった。2015年の収穫は、スタッフとして定着してくれる学生メンバーができたことであるが、2016年以降は若者同士が対話する場としての広がりを求めたいと考えた。そのために、ワークショップのデザインについて再考し、より多くの若者を招き入れることのできる内容を検討することになった。

## (2) ワークショップ・デザインの变化

ワークショップでは何のために、どんなことをするのか。それはどのように若者にとって必要で有用なものなのか。これらに対する回答がワークショップの活動内容に反映されているか検証し、ワークショップのデザインを変更した。

図1に2015年12月に行ったワークショップのデザインを、それを改善して2016年5月に行ったワークショップのデザインを図2に示す。これは、中野(2003)に提案され、堀・加藤(2008)により「マンダラフォーマット」として示された、ワークショップデザインを

表示する形式に則って作成したものである。

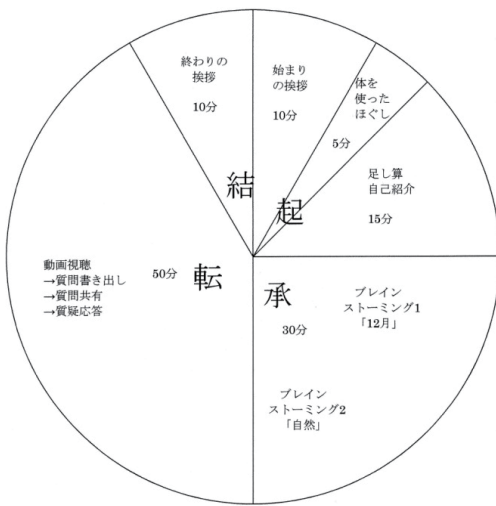


図1 2015年12月のデザイン

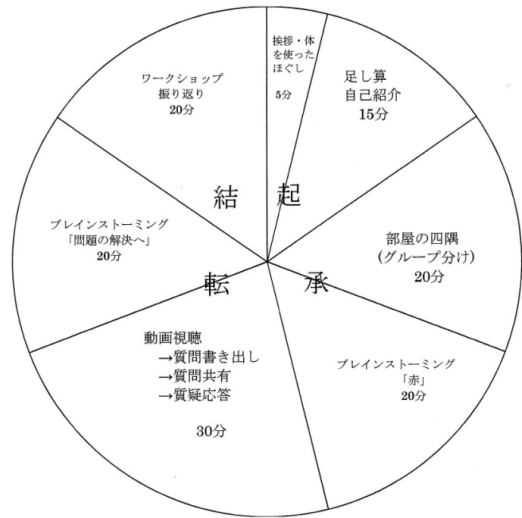


図2 2016年5月のデザイン

2015年のワークショップは、ほぼ図1に示したデザインで活動を行った。愛伝舎 Draw My Life ワークショップでの活動内容をほぼそのまま踏襲している。

特徴的なのは、冒頭と結びの部分である。メインである動画視聴の質疑応答の後は、ゲストと主催者側のあいさつだけで締めくくられている。愛伝舎のワークショップが主な支援対象としたのは、外国につながる小・中学生であり、ワークショップはブレインストーミングと動画視聴、それに伴う質疑応答に重点があった。対話すること自体に対する抵抗感を払拭することが主な目的であるため、このような構成は効果的なのだが、大学生を中心とした若者を対象とする場合は、対話した後に振り返り、現時点での自身の考えについてまとめ、表明するところまで求めることができるし、また、求めるべきであると考え、2016年のワークショップを開始するにあたり、図2のデザインに切り替えた。

大学生ともなれば、「自分」という「殻」ができています。自分の殻に閉じこもり、外を向かなければ対話はうまく成り立たない。自分の殻を少しずつ剥いでいけるよう、自己紹介も兼ねたグループ分けを、対話しながら行えるようにした。

また、2015年の実施状況からみて、一人一人が自分の意見を出してまとめるブレインストーミングにおける一番の問題は、付箋の使い方がわからないことであった。1枚につき、自分の意見一つを書く、ということが理解できなかつたり、書く内容はこれでいいのか、という迷いが見られたりしたため、導入部分に全員が理解できるよう少し時間をかけて、一つの話題についてグループで考えをまとめ、発表する過程を楽しむことにした。ブレインストーミングのルールは、「質より量」「批判禁止」「模倣可」なのであるが、プログラムのデザイン上、ここでは「量」、すなわちブレインストーミングを2回以上行うことより、

「質」、すなわち1回のブレインストーミングを十分理解し、楽しんで行うことにより、メインの動画視聴につなげることを狙っている。

メインの活動として視聴する動画は、Draw My Life の手法で作成したものを使用している。外国につながる学生、留学生の作成する動画に続き、2016年7月には、初めて日本人学生の作成した動画が発表された。いずれも好評を得て、ワークショップ以外での発表も行われた。動画視聴の後は、動画で提示された問題の解決方法について話し合うブレインストーミングを行った。自分自身で決定権を持たない幼いころの問題を、今の自分自身はどのように解決することができるのか、と問うことにより、過去に向き合って今を生き、未来に向かうことに思いをはせてほしいと考えた。

結びの部分は、このワークショップの感想や、今の気持ち、これからどうするのか、どうしたいのか、ということについて全員に発表してもらうことにした。権威のある人のあいさつで終わる、というのではなく、最初にスタッフが発表し、発表した人が次の発表者を指名する、という方式で進められた。

#### 4. 「コトバ・わたし・未来」ワークショップの課題

ワークショップは2016年になって参加者が増え、参加後のアンケートにおいても好評である。2016年7月に行われたワークショップ参加者33名中20名がアンケートに答え、20人中4人が「期待通りだった」、13人が「期待以上だった」としており、12名が「楽しかった」としている。こうした感想が、参加者それぞれにとってどのような学びとなり、どのように発展していくのか、今後見守っていきたい。

おおむね好評であったとはいえ、ワークショップには問題点も少なくない。

外国人の参加者が大幅に増えたのに対し、日本人の、特に生徒・学生の立場からの参加が少ない。日本人は内向き、消極的だから、と片付けたくはない。多文化共生に理解を示し、立場の異なる外国人とのコミュニケーションに肯定的な姿勢を示す学生の姿は、渡邊(2011)、杉原(2014)にも示されている。日本人学生の参加を促す方策が必要である。

参加者が増えれば、ワークショップの活動をまわしていくスタッフの力量が問われることになる。これまでは、コミュニケーション能力が高く、ファシリテーションに向いた、いわば「天然ファシリテーター」ともいえる能力を持つ学生に頼って運営してきた。高いコミュニケーション能力を持つ学生を見いだす努力と共に、ファシリテーションに興味を持っているが、コミュニケーションスキルに不安を持つ学生を訓練し、自信をつけることによって、一対多のコミュニケーションに習熟させ、次世代のロールモデルになる人材を育てていきたい。

ワークショップは様々な立場の人が集まるために、土曜日の開催となるが、外国につながる学生にとって週末の土曜日・日曜日は、家族とともに、または、家族のために行動することが義務づけられる日である。幼い兄弟の世話をしなければならない時もあるし、そ



もそも行動決定権を握る家長の理解が得られないと参加が難しい。家族の理解を得るために、大学としてどのようなことができるのかも考えていきたい。

外国人が日本で生きていくのに、多数派とは異質な者として拒まれ、同化を強いられると感じられるような経験をすることが少なくない。また、日本人にしても、事の大小を問わず、多数派と何かが違うことで疎外感を味わい、傷つく子どもは多い。多感な上に、自分で選べる選択肢が少ない子ども時代にそうした経験から受けた傷は、癒えるのに時間がかかる場合がある。今、成長した自分の視線で過去をとらえなおし、今後について考え、語ることで乗り越えられることもあるのではないだろうか。

今後とも、このワークショップを開催することにより、外国につながる学生、留学生、そして日本人学生が、対話において十分な自己表現を安定的にできる能力を養成し、地域社会とつながりながら、支え合い学び合う環境を整え、支援していきたいと考えている。

## 5. おわりに

ワークショップを開催し、様々な立場の参加者と対話することにより、主催者としても、筆者個人としても得るところは大きかった。ワークショップの企画と実施においては、支援を求めて支えられる喜びを知った。また、ワークショップでは、自身も活動に参加することで、対話を通して共感を得ることの心地よさも味わった。心地よさに安住するのではなく、より多くの人対話の喜びを実感できる場を模索していきたい。

このワークショップは、外国人学生の支援からスタートした取り組みである。外国人学生には汲むべき事情があり、配慮を必要とすることは変わらないが、日本人学生を始めとした日本人の若者にも参加を呼びかけることのできる、多文化共生社会にふさわしい対話の場として育てていきたい。

## 注

- (1) 舟橋(2014)(2015)では、大学内における学籍区分に基づき、「外国籍一般生」としてしているが、本稿では、一般に広く用いられている「外国につながる学生」という呼称に統一する。
- (2) WEB MAGAZINE『アップロード』のウェブサイトによると、Draw My Life とは、アメリカの Youtuber が 2013 年に自分の生い立ちを動画にしたものをアップしたことから始まった新しいコンテンツの名称である。
- (3) 愛伝舎のワークショップで用いられた動画は、Youtube で現在も公開されている。  
Draw My Life 〈日本語／アマダ〉 <https://www.youtube.com/watch?v=XDrv2KRJlkw>  
Draw My Life 〈日本語／キヨシ〉 <https://www.youtube.com/watch?v=6gDoGwXk1f8>  
(2017 年 1 月 25 日最終閲覧)
- (4) 筆者、本学講師である棧敷まゆみ、学生支援課の伊藤由香がワークショップを担当

している。伊藤は、愛伝舎 Draw My Life ワークショップの企画担当者である。

#### 参考文献

- 伊藤由香(2014)「外国につながる子供」を対象としたワークショップ活動の意義『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No. 21、鈴鹿国際大学
- 杉原亨(2014)「大学生の多文化共生志向に関する一考察」『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No. 21、鈴鹿国際大学
- 當作靖彦(2013)『NIPPON 3.0 の処方箋』講談社
- 中野民夫(2001)『ワークショップー新しい学びと創造の場ー』岩波新書
- 中野民夫(2003)『ファシリテーション革命ー参加型の場づくりの技法』岩波アクティブ新書 69
- 中野民夫・三田地真実(2016)『ファシリテーションで大学が変わるーアクティブラーニングにいのちを吹き込むには』ナカニシヤ出版
- 平田オリザ(2001)『対話のレッスン』小学館
- 舟橋宏代(2008)「ニュース視聴を主活動にした上級会話授業ー大学生として日常会話に参加するスキヤフオールディングー」日本語教育学会実践研究フォーラム 2008 ウェブ報告 <http://www.nkg.or.jp/> (2017年1月25日最終閲覧)
- 舟橋宏代・栈敷まゆみ(2013)「2013 年度鈴鹿国際大学外国人日本語環境実態調査」『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No. 20、鈴鹿国際大学
- 舟橋宏代(2014)「大学における外国人学生の学びを支援するためにー外国籍一般生の背景と日本語学習ー」『鈴鹿大学紀要 CAMPANA』No. 21、鈴鹿国際大学
- 舟橋宏代(2015)「外国人学生の自律的な日本語学習を支えるしくみアクティブラーニングにおける位置づけ」『鈴鹿大学紀要 CAMPANA』No. 22、鈴鹿大学
- 舟橋宏代(2016)「外国につながる学生が留学生とともに学ぶ場のデザイナーー大学における日本語学習支援のあり方ー」2016年WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』日本語教育学会 <http://www.nkg.or.jp/> (2017年1月25日最終閲覧)
- 堀公俊・加藤彰(2008)『ワークショップ・デザイナー知をつむぐ対話の場づくり』日本経済新聞出版社
- 渡邊優生(2011)「多文化共生の視点による国際理解・国際交流活動の取組~FSA としての実践報告 2」『鈴鹿大学紀要 CAMPANA』No. 18、鈴鹿大学

#### 引用サイト

- ・WEB MAGAGINE 『アップロード』  
<http://uploadmag.com/archives/2643> (2016年10月17日最終閲覧)